

## 6月5日（月）その26 卓球でも天才少年－13才の張本智和－

いつだったか将棋の天才少年の話をしました。藤井聡太四段は、その後も連勝を続け、現在公式戦 20 連勝中です。連勝数が一つ増えるごとにマスコミの注目度も増し、今回などたくさんのカメラマンがついていました。

さてもう一人天才少年が出現しました、おわかりですか？卓球の張本智和（はりもと・ともかず）選手です。今ドイツで行われている世界選手権に最年少で日本代表に選ばれ、1 回戦に勝ち、2 回戦でなんと日本のチャンピオン水谷隼（みずたに・じゅん）選手を破ったのです。水谷選手は 27 才、卓球の日本選手権 9 回優勝の日本のエースで、リオ・オリンピック銅メダリストです。テレビのニュースで今回の試合を見たが、張本選手は戦う前から「勝つ！」と宣言していて並々ならぬ闘志を感じました。試合は互角以上に日本王者と戦い堂々と勝ったように見えた。水谷選手も完敗を認めていた。たまたま「まぐれで勝った」とは思えなかった。

「13 才が大金星」のニュースは、各国メディアが一斉に報じたようだ。国際卓球連盟も公式サイトで特集を組み、「卓球に年齢は関係ありません」とコメントしたようである。次の日、彼は 3 回戦でも台湾の選手に 4 - 0 で圧勝し、ベスト 16 入りを決めた。国際卓球連盟は、「この少年は偽物じゃない、優勝候補だ。」と、最大級の賛辞を送ったそうである。勢いは止まらず、次の日の試合も勝ち、あと一つ勝てば最年少メダリストとなる。

張本智和は 2003 年に仙台で生まれ、仙台の小学校を卒業後は、JOC エリートアカデミーでトレーニングしていて、東京で寮生活を送っている。両親は元中国国籍の卓球のプロ選手で、お父さんは「日本ジュニア代表」のコーチを務めていて、お母さんも元中国代表の経験があるらしい。5 才年下の妹も天才少女の呼び声が高く、「卓球エリート家族」のようです（日本国籍です）。彼は試合中に得点を挙げると、「チョレイ！」と雄叫びをあげます。あの福原愛選手も「サー」と、気合いを入れていましたね。中国語なのかな？とも思いましたが、ネットで調べてみると、そうではないようです。

張本選手が所属するのは、「JOC エリートアカデミー」である。この団体を知っていますか？一時期日本がオリンピックでメダルが少ない時期がありました。そこで 2000 年（平成 12 年）に、日本政府は国際競技大会で活躍する競技者を育成するため、スポーツ振興基本計画を策定しました。その一環として「JOC エリートアカデミー」が設立され、競技力向上のプログラムの提供、トレーニング、生活力、語学力、学力の向上等の指導が行われているようです。対象となるのは中学生と高校生に限られていて、現在卓球・レスリングなど、47 人の中・高校生がエリート教育を受けているそうです。

トーマス・エジソンは、「天才とは 99 % の努力と 1 % のひらめきである。」と言ったそうです。張本智和は、両親から 2 才の時から指導を受けていて、13 才ではあるが、幼い頃から英才教育を受けているのである。加えて本人の高いモチベーションと努力があって、世界でトップレベルの選手になれたのだ。中学生にいつも「努力は人を裏切らない」と教えてきた。でも努力をしているから必ず成功するとは限らない。環境と才能と努力と運と・・・やっぱり天才なのだ。藤井聡太四段とともに今後が楽しみである。

## 6月6日（火）その27 釈迦の指

毎週金曜日は、研究生の皆さんにローテーションで「3分間スピーチ」をやってもらっています。題材は研究所で購入している「日本教育新聞」の記事から一つを取り上げて、みんなに紹介するという形でやってもらいました。皆さんそれぞれ説明の仕方を工夫していて、ホワイトボードを活用したり、紙をどんどん開いていって説明する手作りのプレゼンを活用したりと、毎回楽しみです。

先日は、幼稚園の山里章子先生の番でした。メインは、甲府市の菜の花保育園という所の取組を紹介する新聞記事でしたね。みんなで育てたパンジーの枯れかけた花を摘み取る作業をしていたとき、一人の子どもが、手に色がつくことに気づきます。担任は、「きれいな色だね、水につけてみようか。」と言います。ビニール袋に水と花びらを入れさせて、「ビニールの上からもんでみたら」と声をかけました。綺麗な色水ができたことに驚いたその子が他の園児に伝え、みんなで色水遊びに夢中になります。様々な色水ができると、「お花のジュース屋さん」という遊びに変わった……などの話でした。

章子先生はこの話をメインに、起承転結をきちんと考え、メリハリのある話に仕上げていましたね。〔起〕梅雨空、デイゴの花が鮮やかに咲いている。デイゴの花が鮮やかに咲くと台風が多いという沖縄のことわざ 〔承〕新聞記事「菜の花保育園の色水遊びの話」 〔転〕色水遊びが、ジュース屋さんごっことか、ハーブティー「マローブルー」の話（熱湯に注ぐと、色が変わる）など、いろいろな遊びに発展した話 〔結〕意図的な園の環境構成がいかに大事であるか。パンジー園という環境構成が、色水遊びやジュース屋さんごっこに発展したり、自然環境に関する思考力のめばえにつながったりする。という話でした。

私はこの話を聞いて、「釈迦の指」の話を思い出した。皆さんは、「釈迦の指」の話を知っていますか？「ある日お釈迦様が天上から人間の世界を見ていたら、ある男の車がぬかるみにはまって動けなくなっていました。周りに誰も人がいなくて、その男は自分でやるしかないと思って、渾身の力を込めて荷車を引きました。そのときお釈迦様が天上から、指を少し動かすと、車はぬかるみから出て、男は自分の力でできたと思い喜んで荷車を引いて行きました。」……まあ、だいたいこんな話です。

菜の花保育園の先生が、子どもの手に色がついたのを見て、「きれいな色だね、水につけてみようか。」と言います。子どもがその通りにすると、先生はそのビニールに入れた水と花びらを見て、「ビニールの上からもんでみたら」と言います。濃い色水ができ、その結果に感動した園児が他の子に伝え、園児全体の遊びとなり、さらにジュース屋さんなど他の遊びにも発展していきます。この一連の指導の中で、園児達は自分たちで見つけて、遊んでいると思ったはずです。自分達の力で成長したと思わせる教師が「教え上手」なのです。この先生の発問は、まさに「釈迦の指」であったと思います。

教師の一言は、「諸刃の剣（もろはのつるぎ）」となることもあります。教師の一言で奈落の底に突き落とされたという子もいれば、教師の一言で人生が変わったという子もいます。さて、あなたはどんな言葉を……？

## 6月9日（金）その28 82年前（1935年）の写真

5日（月）の沖縄タイムスは、一面トップで「82年前平和世の記憶」という大見出しで、朝日新聞大阪本社の倉庫で沖縄各地の人々の暮らしを撮影した1935年のネガフィルムを発見したと報じた。朝日新聞は沖縄タイムスと提携しているからなのか、琉球新報では全く報道されていない。ま、一応沖縄タイムスのスクープだ!!

私はその写真を見て、目を奪われた。こんなに生き生きと庶民の素朴な表情や暮らしぶりを写したものは、これまでに見たことがない。糸満の漁師やアンマー達、那覇の市場で働く女性達、洞窟内でパナマ帽を編んでいる人たち……などなど、鮮明な写真が277点も発見されたそうだ。

1935年（S10）は、沖縄戦の10年前、日本が軍国主義にひた走る時代だと思うが、写真に映った人たちの着ているものや表情からは、そんなことは全く連想できない。特に糸満の漁師の写真が多く、獲物を両手に持ち笑顔の写真もある。

あの沖縄戦で県全体が焦土と化したため、沖縄には戦前の写真がほとんど残っていない。戦後も昭和30年代までは、写真は写真館で写すもので、個人用のカメラを持っている人はあまりいなかった。カメラが一般に普及したのは、昭和40年代の高度経済成長期に、コンパクトカメラ（オリンパスのペンシリーズなど）が発売されてからである。名刺よりも一回り大きい程度のそのカメラは、難しい操作もあまりいらないので爆発的に売れて、写真を撮ることが庶民のものになった。

1978年に世界で初めて、一眼レフのオートフォーカス（シャッター速度と絞りの自動化、及び自動焦点）を、日本の企業「コニカ」が発売した。

また1980年代になると、富士フィルムの「写ルンです」などのレンズ付きフィルム（使い捨てカメラ）が発売された。カメラにフィルムを装着する手間がいらないので、装着ミスなどの失敗がない。また家にカメラがなくても、観光地などで手軽に買うことができ、写真の質もまあまあいいので、爆発的に売れた。

時代が進んで現在では携帯電話やスマートフォンの普及により、メールで写真を添付・送信したり、写真や動画をSNSに投稿したりと、写真や動画は、手軽でありふれたものになった。

沖縄戦の写真や本は、今では図書館などで見ることもできるし、ネット検索でも多くの画像がヒットする。しかし昭和50年代まで、沖縄戦の写真は誰も目にすることができなかつた。どこにもなかつたのだ。

1980年代になってアメリカの公文書館に膨大な沖縄戦の記録が残っていることがわかり、1983年（S58）から「1フィート運動」が始まった。沖縄戦の記録フィルムを一人1フィートずつ購入し、映像を通して「戦争を知らない子どもたち」に沖縄戦を伝え、平和を希求する運動にしていこうとするものであった。約8900万円もの寄付金を集めることができ、たくさんのフィルムが購入された。写真集やDVDの日本語版や英語版も作られ、世界中の人たちが見ることができるようになった。

獲物を手におどけている糸満の漁師、東町市場のアンマー達、洞窟での「帽子組まー」の人たち……彼らは沖縄戦を生き延びることができたのだろうか。